

千年村プロジェクト
2019年度
伊豆半島周辺疾走調査報告書



早稲田大学理工学術院 創造理工学部建築学科 建築史研究室 中谷礼仁研究室

千葉大学大学院 園芸学研究科 緑地環境学コース
環境造園領域 都市環境デザイン学研究グループ 木下剛研究室

東京都市大学 工学部 建築学科 建築計画 福島加津也研究室

慶応義塾大学 環境情報学部 石川初研究室

ものづくり大学 建設学科 土居浩

東京大学 生産技術研究所 林憲吾

元永二郎

高橋大樹

松木直人

辻武史

2019年 12月

千年村プロジェクトについて

〈千年村〉とは、千年以上にわたり、度重なる自然的社会的災害・変化を乗り越えて、生産と生活が持続的に営まれてきた集落・地域のことをさす。

千年村プロジェクトは、全国の〈千年村〉の収集、調査、公開、顕彰、交流のためのプラットフォームとして構想された。2011年に発生した東日本大震災後に、優れた生存立地を発見しその特性を見出す必要性を感じたことがその発端である。関東と関西に研究拠点をもち、環境・地域経営・交通・集落構造という4つの要素を重要視し、それらに関する諸分野の研究者・実務者によって運営されている。また、この活動は、2014～2017年度科学研究費助成事業「国土基盤としての〈千年村〉の研究とその存続のための方法開発」に採択されている。

様々な圧力を受け、変容を受け入れつつも、長らく存続してきた歴史を持つ地域には、生産性や防災性、経済的交流の基盤などが構築され、持続可能な土地固有のシステムが育まれてきたと考えられる。山際の集落、その眼下に広がる水田、集落を護る鎮守の森、他所へ通じる峠道、異国へ向かう海原。日本における地域の多くにはこうした共通する特徴が具備されている。しかし、これらの特徴は突出した文化財的評価の対象というよりは、むしろ健全な国土を日常的にささえるものとして評価されるべきであろう。

千年村プロジェクトは、そのような地域に実際に赴き、環境・地域経営・交通・集落構造の各視点から、地域が持続してきた要因の分析を行なっている。そしてその地域が良好な生存条件を保っていると確認できた場合、その地域を〈千年村〉として認証する。認証によって、当該地域の持続要因を理解していただくとともに、これからの千年に向けた持続可能な地域づくりの支援を行うことを目標としている。

目 次

第1章 本報告書の目的	1
1-1. 本報告書の目的	
1-2. 調査の位置づけ	
第2章 基礎研究編	2
2-1. 『倭名類聚抄』記載地名の現在地比定による千年村候補地の発見	
2-2. 「アイヌ語地名」からの千年村候補地の発見	
2-3. 「おもしろそうし」記載地名の現在地比定による千年村候補地の発見	
2-4. 展望	
第3章 2019年度伊豆半島周辺疾走調査 各村の報告	4

第1章 本報告書の目的

1-1. 本報告書の目的

本報告書は2019年12月22-23日にかけて行われた「伊豆半島周辺疾走調査」において得られた知見および考察を報告することを目的としている。

1-2. 調査の位置づけ

本研究は今後の集落地域の存続のための評価手法の開発を目的としている。千年を超えて生産と生活が持続していると考えられる地域を千年村候補地とし、その持続要因に関する調査を行う。そしてその地域が良好な生存条件を保っていることを確認した場合には、その地域を〈千年村〉として認証する。〈千年村〉は日本の国土の土地利用と景観の基層をなしてきたと考えられ、これらの正当な評価手法が必要である。そのために以下の3つの段階を達成していく。

- (1) 平安期文献『倭名類聚抄』に記載された「郷」の比定地をベースとした全国の千年村候補地のデータベースの作成および公開
- (2) 千年村候補地を「環境」「地域経営」「交通」「集落構造」の視点から調査し、それらの関係および持続要因を解明
- (3) 各地域の存続に関する普遍的要因と歴史的要因を元にした〈千年村〉の認証基準と持続手法の開発

上記の実現のためには、より多くの千年村候補地を網羅的に調査することが必要であり、本報告書で報告する鬼怒川及び渡良瀬川周辺疾走調査はそのひとつとして位置づけられる。

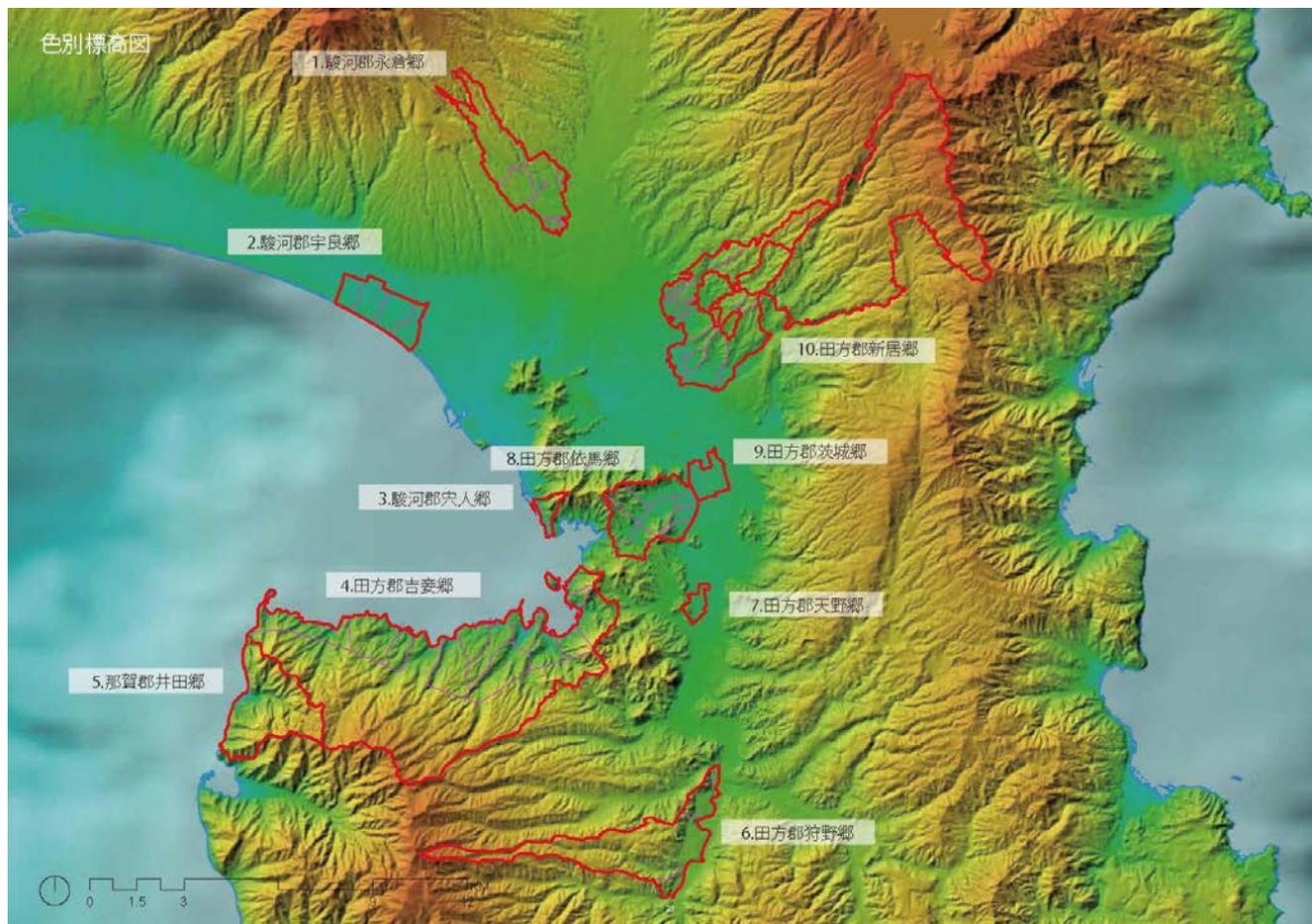


図1 伊豆半島周辺千年村

第2章 基礎研究編

2-1. 『和名類聚抄』記載地名の現在地比定による千年村候補地の発見

千年村候補地をひろく全国から発見するために、平安期辞書『和名類聚抄』（註1）に記載される古代地名と、それらを現在地へと比定した既往成果を用い、空間的にプロットした。それらを千年前から現在までを空間的に接続する千年村候補地とした。

主要参考文献は『角川日本地名大辞典』（註2）である。ここには『和名類聚抄』記載地名の現在地比定に関する先行研究がまとめられている。その比定精度は、以下の7つに分類される。

1. 単一の大字に比定される
2. 複数の大字に比定される
3. 市域に比定される
4. 河川流域など複数の市域にまたがる範囲に比定される

5. 比定に関する説が異なる
6. 比定地は未詳とされる
7. 比定地に関する記述がない

本プロジェクトでは、以上のうち現在の行政区画・大字領域に比定されるものを抽出しプロットしている。その数は『和名類聚抄』記載郷名3986個のうち1977箇所である。その中でも、大字領域への比定数には地域差が見られる。また『和名類聚抄』製作時の古代国に該当しない北海道、青森県、沖縄県にはプロットがなされていない。

しかし、古文献記載地名の現在地比定地の可視化という手法は、『和名類聚抄』以外の文献にも展開でき、同文献では発見できなかった千年村候補地を発見することが可能である。次項以降、その展開事例として、北海道と沖縄の千年村候補地について述べる。

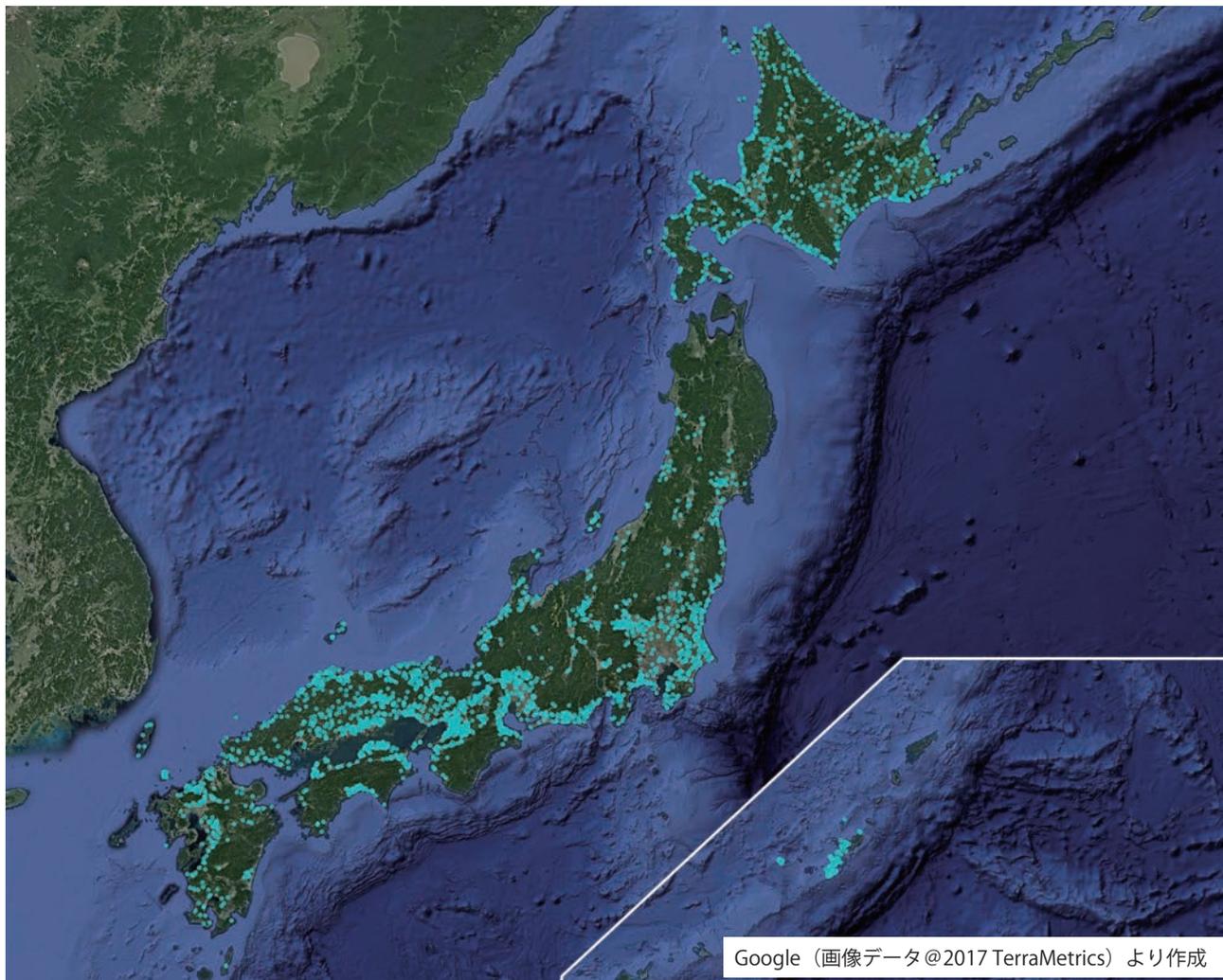


図1 千年村候補地のプロット（千年村候補地の可視化を第一としているため、プロットの範囲がその候補地の領域を示すものではない）

2-2. 「アイヌ語地名」からの千年村候補地の発見

『和名類聚抄』に記載のない北海道については、「アイヌ語地名」を用いて千年村候補地の発見を試みた。

13~17世紀頃まで栄えた北海道のアイヌ民族は、生活に利用する場に地理的及び環境的特質に沿った地名をつけていた。現北海道の地名の多くがそれらアイヌ語地名を基にされている。そこで、北海道環境生活部アイヌ政策推進室が公開している「アイヌ語地名リスト」（註3）を資料とし、千年村候補地の抽出を行なった。リストに存在する地名は以下の7つに分類できる。

1. 単一大字及び字
2. 複数大字
3. 市町域以上
4. 和名由来
5. 山・川などの環境表現名
6. 現在存在しない地名
7. その他

以上のうちから大字領域に該当する地名を抽出し、それを千年村候補地とした。その数は「アイヌ語地名リスト」記載地名1032個のうち620箇所である。ただし、「アイヌ語地名リスト」には記載のない、多くのアイヌ語地名が存在する。あくまでアイヌ語地名の立地傾向を把握するための目安となっている。

なお、北海道におけるプロットは千年という単位ではないが、「アイヌ語地名」を根拠にそれを可視化することで、新たな地域への研究の展開の足がかりとなった。

2-3. 「おもろさうし」記載地名の現在地比定による千年村候補地の発見

北海道と同様に『和名類聚抄』に記載のない沖縄については、古琉球時代の歌謡集『おもろさうし』（註4）で確認できる地名と、それらを現在地へと比定した既往成果を用い、千年村候補地の発見を試みた。

『おもろさうし』は首里王府によって編纂さ

れた沖縄の祭式歌謡が収録された歌謡集である。それら祭式歌謡には、当時の地名が多く含まれており、16~17世紀の地名を知ることができる。

主要参考文献は、『角川日本地名大辞典』である。ここには沖縄県における『おもろさうし』に見られる地名の現在地比定に関する先行研究がまとめられている。その比定精度は以下の5つに分類される。

1. 字
2. 町・複数字
3. 比定に関する説が異なる
4. 比定に関する記述がない
5. その他

以上のうちから1字にあたる地名を抽出し、それを千年村候補地とした。その数は『おもろさうし』記載地名228個のうち98箇所である。

なお、北海道と同様に沖縄のプロットは千年という単位ではないが、『おもろさうし』を根拠にそれを可視化することで新たな地域への研究の展開の足がかりとなった。

2-4. 展望

現在「千年村ウェブサイト」（註5）にて公開されているプロット情報（図1）がすべての千年村候補地を示すものではない。実際に、ウェブサイトでの公開以降、一般提供情報によって新たに多くの古代郷が現在地比定されている。このデータベースが呼び水となって、新たな資料や情報が蓄積され、より多くの千年村候補地が発見されることを期待している。

（文責：鈴木明世）

(1) 平安期文献『和名類聚抄』、源順著、931-938成立か。『和名類聚抄』は、古代律令国家が各地を国・郡・郷で管理していた時代の地名が記載されている。

(2) 『角川日本地名大辞典』は、日本全国の地名、その由来・沿革とその地の歴史を、都道府県ごとにまとめた辞書。全49巻、別冊2巻で、1978-1990年にかけて出版された。

(3) 1999年9月に北海道によって設置された「アイヌ語地名普及会議」によって、アイヌ語地名研究者である山田秀三の既往成果（主に『北海道の地名』北海道新聞社、1984年）を中心に既存の基礎的なアイヌ語地名解をまとめられた。2007年1月時点での地名に当てはめている。

URL: http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/ass/new_timeilist.htm (2017/12/● 閲覧)

(4) 「オモロ」という琉球方言で伝承された祭式歌謡を編纂した歌謡集で沖縄最古の文献資料。尚清王の嘉靖10年（1531年）から尚豊王の天啓3年（1623年）にかけて首里王府によって編纂された。全22巻。収録数は1554首。

(5) 千年村プロジェクト URL: mille-vill.org

第3章 2019年度疾走調査 各村の報告

第3章では2019年度伊豆半島周辺疾走調査において悉皆的に調査をおこなった4村10地域の概略を以下の5つの視点から示す。

- 1)文献・地図等の情報から得られる客観的情報
- 2)実見によって得られた客観的情報(環境・地域経営・交通・集落構造等)
- 3)考察
- 4)集落を象徴する風景と名前
- 5)断面ダイアグラム

01	駿河郡永倉郷	5
02	駿河郡宇良郷	7
03	駿河郡穴人郷	9
04	田方郡吉妻郷	11
05	那賀郡井田郷	13
06	田方郡狩野郷	15
07	田方郡天野郷	17
08	田方郡依馬郷	19
09	田方郡茨城郷	21
10	田方郡新居郷	23



図1 比定の大字領域(筆者加筆)Google Earthより



図2 土地条件図(筆者加筆)国土地理院より



図3 元長窪_牛舎 撮影＝山路

御長家入植地の図

「長泉町史」より転載

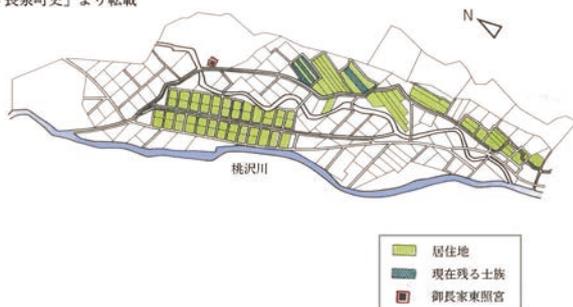


図4 御長家入植地の図(筆者加筆)長泉町史より

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

富士山の南に位置する愛鷹山の麓に形成された郷。元長窪・上長窪・下長窪の3つの大字からなる。特に元長窪では尾根と谷の連なる地形が特徴的である。尾根と谷は最大約50mもの高低差があるが、住宅は主に桃沢川の流れる谷地に沿って見られる。尾根は畑として、谷は住宅とともに水田として土地利用の区分が見られる(図2)。

長泉町南部、特に下長窪は台地の上に位置し、市街地化が進んでいる。

2) 実見によって得られた客観的情報

・環境

桃沢川の流れる谷地には住宅や水田が多く見られた。一方で尾根には畑や果樹園が多く見られ、ビニールハウス栽培も行われていた。畑ではサトイモ、タマネギ、キャベツ、トウモロコシなどが栽培されていた。また畑の隣に牛舎も見られた(図3)。

元長窪は土石流の危険地域に指定されているが、ここ100年ほど大きな災害は起きていない。

古くからある家は御長屋と呼ばれるエリアに多く、郷の境界付近で最も山頂寄りのエリアには比較的新しい家が見られた。

・地域経営

大政奉還の翌年、沼津周辺には旧幕府の陸軍兵士約1300人が集団移住し、愛鷹牧を取り壊して長屋を建てた。それが御長屋と呼ばれ、元長窪内の地名ともなっている。入植から150年経った今も土族4戸の子孫が暮らしている(図4)。

明治5年、生活に貧窮する土族たちの姿を見た江原素六が土族60名を社員とする結社牡牛社を結成し、日本の先駆けとなる西洋牛の牧場経営を開始した。牛乳やバター製造などの酪農、そして牧畜を行った。また桃沢川から切り出した桃沢石が全国的に評判となり、牧畜とともに採石が土族の生活を支えた。

・交通

新東名高速道路(2012年開通)と東名高速道路(1968年開通)、伊豆縦貫自動車道(1992年開通)により東西の交通も整備されており、東名高速道路は一部大字の境界ともなっている。



図5 元長窪_墓の様子 撮影=加藤



図6 元長窪_眼下に広がる上長窪・下長窪 撮影=斉藤



図7 元長窪_尾根上の畑 撮影=山路

・集落構造

墓は小さなまとまりごとに点在している(図5)。一つ一つは立派であるが、元長窪の世帯数を考えると明らかに数が少ない。また元長窪内には、土族によって建立された長窪東照宮、奈良時代に創建された桃澤神社が存在するが、寺社の数は4つと少ない。

3) 考察

永倉郷が持続してきた要因として2つのことが考えられる。1つは地形的要素である。谷地に住宅が形成されてきたことから、この地域では川の氾濫は滅多に起こらず、むしろ自然の恵としてこの地域を支えてきたのではないかと推測される。

2つ目は土族の存在である。土族が集団移住したことにより、北側まで集落が拡大し、もともと30数戸であった村が100戸超の村に変貌した。生活のエリアが広くなり、土族によって採石や牧畜の産業がもたらされた。土族の存在によって産業や文化の面でも、この地域が持続してきたことが考えられる。

4) 集落を象徴する風景と名前

「谷と尾根の連なる土族村」

谷、樹林、尾根、樹林、尾根、樹林という地理的要素を踏まえた上で水の豊富なところに住宅、高いところには畑と、土地利用が明確になされていたこと、また土族の存在によって新たな産業が発展してきたことが地域の存続につながったのではないかと推測される。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

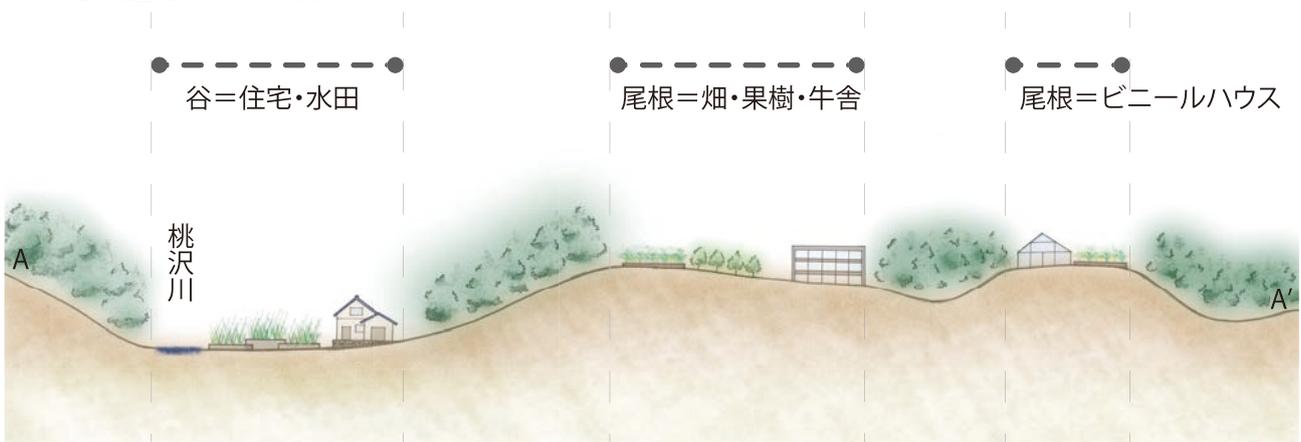


図8 A-A'断面ダイアグラム(筆者作成)



図1 比定の大字領域(筆者加筆)Google Earthより



図2 今昔マップ(1894年~1915年、筆者加筆)



図3 住居裏の土地利用 撮影＝松木



図4 千本街道 撮影＝近藤

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

駿河湾に面するこの郷の大部分は東方の沼津から伸びる砂州に立地している。この砂州上に街道が通り集落はこの街道に沿って形成された。江戸期に入ると東海道が整備され、人や物が盛んに行き交う場所として栄えたほか、原宿の定助郷としても機能した。

海風が強く、海岸の千本松原や集落内の一部住居にみられる屋敷林(図5)は防風の役割を担っている。

砂州の北側は愛鷹山の麓まで後背湿地が広がっており、弥生時代までは内湾となっていた。後背湿地には江戸期に干拓されるまで浮島沼という沼があり、高潮の際は吉原から海水が入り潮に浸かっていた。

2) 実見によって得られた客観的情報

・環境

砂州の北端に沿ったJR線の線路を境に、北側の後背湿地部分は「線北」地域と呼ばれている。線北は農業を主とするエリアで、このうち前川を境にして北側で稲作、南側で畑作が行われていた。しかし開発により盛り土されて工場やアパートとなっている場所も多いほか、残った水田も畑に変わっている。昭和期に放水路ができるまでは洪水が頻発し、線路のすぐ際まで水が来るともあったという。また、沼川は天井川で、水田の排水性が悪かった。

海岸では地引き網漁が盛んに行われていたが、現在は衰退してしまっている。

・地域経営

4つの比定大字で今でも地域の区分がはっきり分かれている。年に一度のお祭りは同じ日に行うものの相互の交わりはなく個々の地区ごとに行う。

・集落構造および地域構造

郷全体で開発が進んでいるものの旧東海道沿いは街村の土地割りが残っている。加えて旧東海道の北側では、かつてから建物のあった場所は旧東海道の高さに合わせて30~40cmほど敷地全体が嵩上げされているなどの痕跡が見られる。

この地域は災害のリスクが高いうえ湿地も農業に適さない環境で、安全で豊かな土地とは言えないのが実情である。しかし、砂州という唯一の安全地帯を有効に使い、限られたスペースの中に街道、集落、

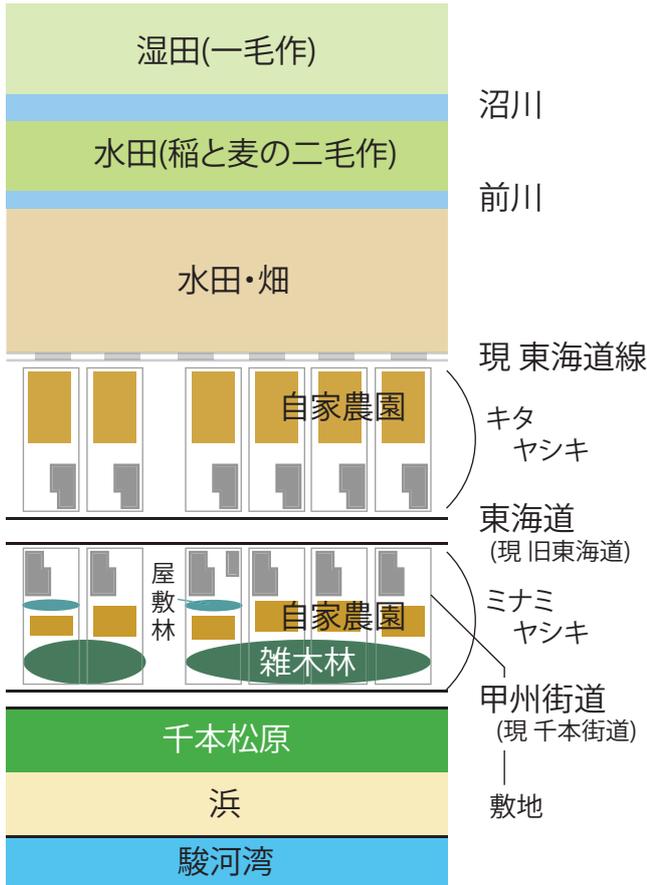


図5 江戸期の土地利用のダイアグラム



図6 線北側の線路際 撮影＝近藤

防風林、漁業施設といった生活基盤施設が帯状に配され集約されていた点が宇良郷の特徴と言える。

また、半農半漁の形態をとることで、採れたイワシを干鰯として利用し米の収量を上げるといった工夫が見られる。

・交通

現在の千本街道(図4)はかつて甲州街道という細い道だった。甲州街道が千本街道に拡幅整備されたことが集落と浜との関わりを分断するきっかけとなった。

3) 考察

このように土地の条件が悪く、幾度の水害により被害を受けてもなお生活を続けられた理由のひとつに街道の存在があると考えられる。砂州上には古くから甲州街道があり、後年になって東海道が通るようになったが、これらの街道が農産物や海産物の流通に大きく寄与したほか、運送業などの往来する旅人を相手にした商業の機会創出に繋がったと考えられる。このように、副業や住民同士の協力という形で農業をバックアップすることで生活が維持されてきたと考えられる。

更に街道を軸とした集落構造であることも宇良郷における街道の重要性を裏付けていると言える。

4) 集落を象徴する風景と名前

「ボーダー村」

浜、松原、林、畑、住居、街道、水田などの構成要素が帯状に並んだかつての土地利用や、微地形を読み水害から逃れられるギリギリのラインを見極めて生活していたことから。

5) 断面ダイアグラム (図7参照)

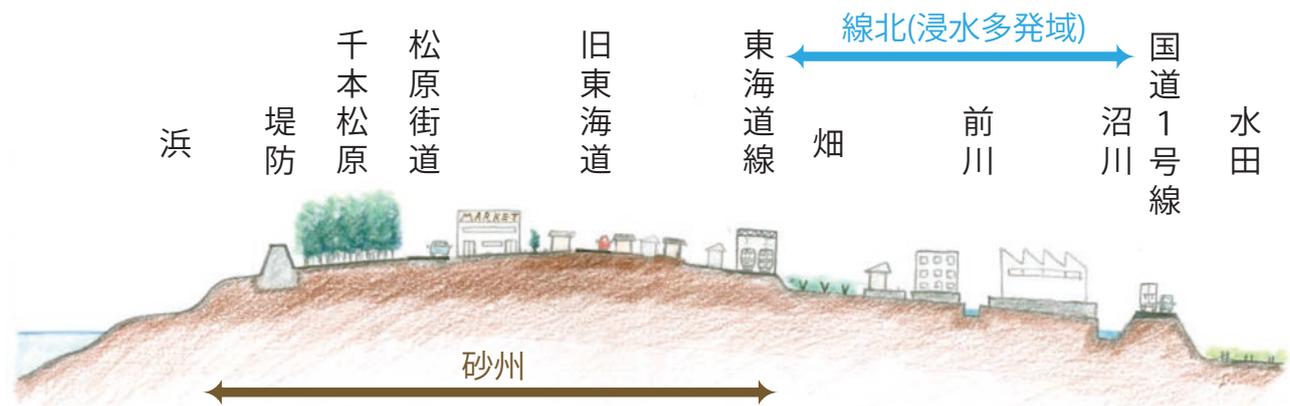


図7 断面ダイアグラム

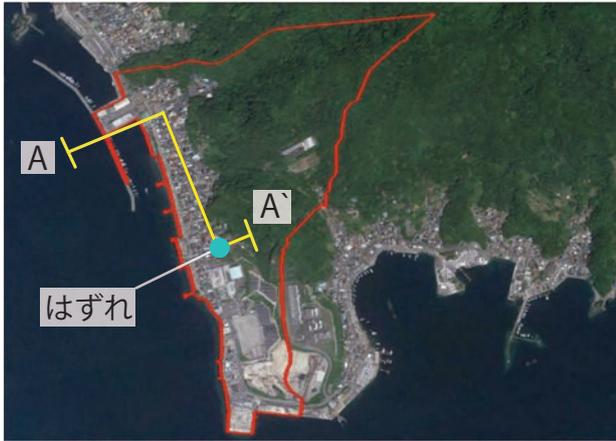


図1 比定の大字領域(Google Earthより)



図2 密集した住宅(石川撮影)

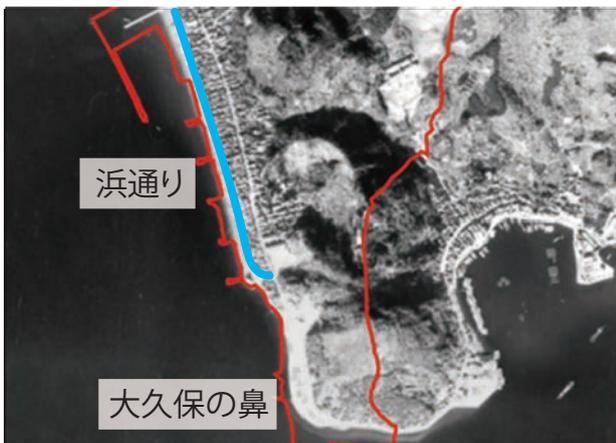


図3 1961～64年の山地跡(国土地理院地図より加筆)



図4 削られた山地跡(石川撮影)

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

郷域は南北に長く、郷は一つの大字のみで構成される(図1参照)。西側の自然堤防上に住宅は密集し、背後には急峻な山地斜面が確認できる(図2参照)。

「大久保の鼻」と呼ばれる南側では、1945年頃まで山地が確認できるが、その後1960年代には消失している(図3,4参照)。

2) 実見によって得られた客観的情報

・環境

昭和38年に獅子浜に嫁いできた方の話によると、当時から現在までの間で、台風によって国道414号線まで浸水したことが1度あったと伺った。この浸水被害を受けて、40年程前に砂浜を埋め立て、堤防が建設された。堤防の建設によって、砂浜で捕れていたアサリやサザエ、ペンペンガニと呼ばれる渡り蟹は見られなくなった。

津波対策として、門が設置されているほか、静浦地区センターから山へ避難できる道がある(図5参照)。

かつては漁業が主な産業であったが、現在は衰退し、かつて「埋め地」と呼ばれた南側に干物を製造する加工場が残っている。

・地域経営

毎年9月下旬に浜通りを通行止めにして、小中学生が山車を担ぐ祭りがあったが、人手不足のため、現在は2年に1度行われている。

・交通

獅子浜は駿河湾の奥に位置し、波が穏やかであった。また、平坦で広い砂浜があったことから、獅子浜のみならず周辺地域全体の船置き場として利用されていた。

・集落構造

6つの村(志下、馬込、獅子浜、江ノ浦、多比、口野)を合わせて静浦地区と呼び、獅子浜はその中心として銀行、農協、郵便局、学校があったが、現在は農協のみが残っている。また、本能寺裏にあった中学校は統合され、5年ほど前に小中一貫校が建設された。

獅子浜の境界は「はずれ」と呼ばれ、そこには目印として石の地藏が置かれ、現在でも残っている(図1,6参照)。



図5 津波対策の門(石川撮影)



図6 土地の境界を示す「はずれ」(石川撮影)



図7 埋め立てによって失われた砂浜(石川撮影)

3) 考察

獅子浜は、砂浜との関わりが強い場所であり、住民との話でも、砂浜でアサリやシジミなどの貝やカニを捕って遊んだという思い出を伺うことができ、砂浜と住民との生活が密接に関わってきたことを感じた。また、平坦で広い砂浜は、周辺地域の船置き場としても利用されていたことから、獅子浜は周辺地域の中心地として大きな役割を担っていたと考えられる。しかし、砂浜が埋め立てられ、堤防が建設されたことで、それまでの中心地としての役割が弱くなったと推察できる。また、砂浜を埋め立てたあと、砂浜に変わって獅子浜での生活や産業を支える基盤を見出すことができなかつたことも、獅子浜での産業の衰退や人口減少の一因となつたのではないかと推察できる。

4) 集落を象徴する風景と名前

「浜とともに…村」

かつて、獅子浜の産業や、周辺地域に対する獅子浜の役割は、獅子浜のもつ広い砂浜があつてのものであつた。しかし、その砂浜が失われてしまったことで、獅子浜の産業や役割、さらには海と人との繋がりが薄れてしまったように感じた(図7参照)。

一方で、メジナやクロダイが釣れることから、漁港や堤防が有名な釣り場となつていたり、「大久保の鼻」にダイビングスポットがつくられたりと、海と人との関係が新たな形で築かれつつあることも確認できた。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

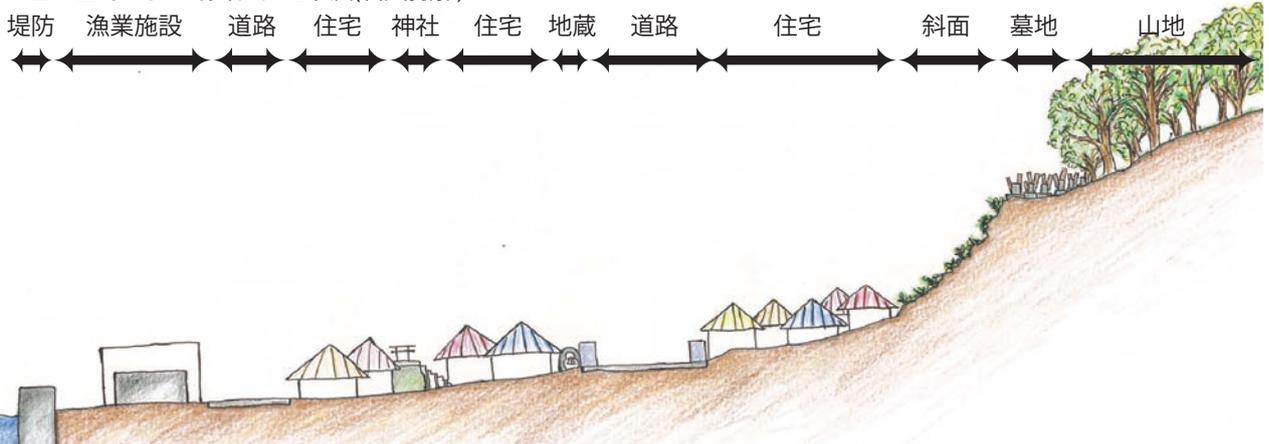


図8 A-A`断面ダイアグラム(著者作成)



図1 比定の大字領域(筆者加筆) Google Earthより

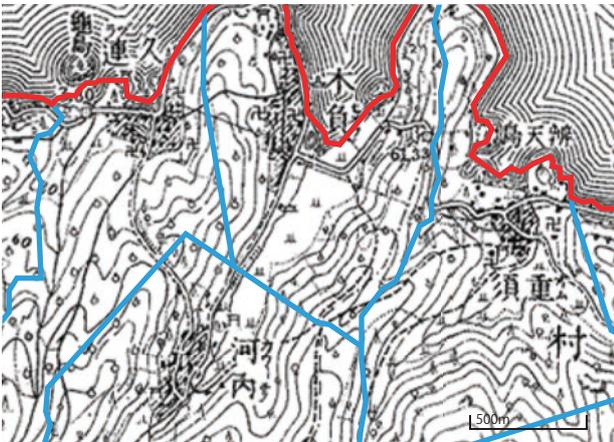


図2 昭和8年_地図(筆者加筆)今昔マップより



図3 西浦木負 (筒井撮影)



図4 仲屋_文化財 (石川撮影)

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

郷域では海岸沿いの集落が多く見られるが、西浦木負と西浦河内では郷域の中で唯一沿岸沿いの集落と内陸の集落が農地を挟んで隣接している。西浦河内には3つの屋号が存在し、そこから分家していった者達が河内及び木負の集落を形成したと言われている。西浦木負にはかつて塩畑が広がっていたが、近世初期になると田畑として開発されたことから現在海岸沿いで見られる集落はこの土地利用の変化に伴い作られたものであると推測される。また、河内川沿いでは明治期頃までは水田が広がっていたが、山の斜面を活用した柑橘栽培が始められると、柑橘栽培の収入が高いことから水田も柑橘栽培地に変化していった。

2) 実見によって得られた客観的情報

・環境

河内川が南北に流れており、河川周辺の平地から山の斜面まで柑橘樹林が広がっている。沿岸部の西浦木負でも柑橘栽培が盛んに行われており、豊かな資源のある駿河湾では魚の養殖場や釣りのスポットとしての利用が見られた(図3)。また、近年の傾向としてこの地域がアニメの舞台となったことからアニメに関連した観光産業にも取り組んでおり、それを目的とした若い観光客の姿が多く観られた。

・地域経営

河内では毎年7月頃に天王祭が行われ、地域の氏神である御崎神社と子聖神社で青年達が悪魔払いとして神楽舞をする。神楽舞はこの地域の屋号の1つである仲屋(図4)でも行われ、最後は御崎神社に神輿を納めて終了となる。

・集落構造

この地域では農地と住宅が分かれており、住宅は集落内にまとまって存在している。農地には所有者ごとに収穫物や道具を保管する倉庫(図5)が複数設置されており、石造りの建物(図6)や土壁の倉庫など長年残されている建築物が多く見られた。また、西浦河内と西浦木負の集落間の交流は特別なく、それぞれのコミュニティを形成している。



図5 収穫物の倉庫と農業用モノレール (石川撮影)



図6 西浦河内_高台の住居 (石川撮影)



図7 みかん畑 (石川撮影)

3) 考察

西浦河内には市の指定有形文化財である禅長寺や天然記念物に指定された大杉があること、鎌倉時代を由縁とする伝説が言い伝えられていること、またこの地域の集落構成や建築物の様子などから、西浦木負よりも西浦河内の集落の方が古い歴史を持っていることが推測される。

また集落構造に関しては、この地域は平地が少ない谷あい位置しており、平地のほとんどは河内川の河川域となっている。したがって防災面とより広域な農地の確保のために、河川沿いの平地は農地として利用し、集落を台地上に形成したと考えられる。

今回の調査より、これらの集落が存続し続けてきたのは、昔からの伝統行事や地域の営みを受け継ぎながらも、時代に合わせて新しいものも受け入れてきたためだと考えられる。

4) 集落を象徴する風景と名前 「渡来更新村」

この集落の最大の特徴は平地から山の斜面まで広がるみかん畑(図7)であり、江戸期に九州からの難破船が漂流していたところをこの地域の人々が救出し、お礼として船に積んであった紀州のみかんをもらったことから栽培が始められたと言われている。また、禅長寺には菖蒲御前が源頼政、子仲綱の遺骨を持ってこの寺に潜んだという伝説が残っていたり、近年ではアニメの舞台地となったことを生かして観光業を行なっていることから、この地域では外から渡来したものを受け入れて地域を更新している、といった特徴が見られる。

5) 断面ダイアグラム(図8参照)

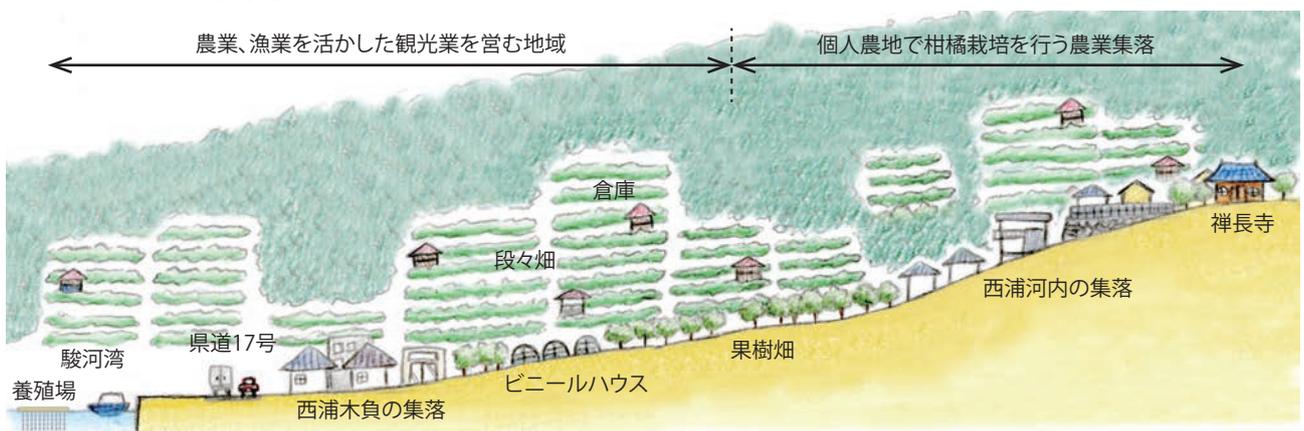


図8 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域 Google Earthより



図2 1894~1915年の地図 国土地理院より



図3 明神池と棚田状に作られたミカン畑 撮影=東野



図4 昔ながらの薪窯で作っている製塩所 撮影=東野

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

那賀郡井田郷は静岡県沼津市に位置し、山地に囲まれ、海に開けた立地のため、古くは移動手段が船に依存していた。

砂嘴が閉じてその後でできた後背湿地(泥質)と、川による堆積からできた谷底平野(砂礫質)が主な生活の場となっている。明神池は天然のため池で、砂嘴が閉じてできたにもかかわらず淡水の池である。地図を見ると山際の崖錐地は70年代頃から果樹園として利用されていることがわかる。

郷内にある二つの神社は井田神社と池大明神で、井田神社は延喜式の神社である。また、松江山に29基、丸塚に4基の横穴式石室を有する円墳が確認されている「井田松江古墳群」が広がっている。

2) 実見によって得られた客観的情報

・環境

水田は川から水を引いて行っていたが、数年前に枯れてしまったことがあったため、現在は明神池をため池として使うために、川の水を明神池に一度ひいて、それをポンプで吸い上げて使っている。

・地域経営

多くの方々は、崖錐地でミカンを栽培しながら民宿を兼業している。ほかに副業として、製塩、ダイビング小屋やキャンプ場の経営、舟渡などを行っている。

水田は自家消費、民宿用で、基本的には流通していない。

・交通

昭和40年代まで陸路が開通しておらず、交通は船に依存していた。石切場でとれた石を江戸に運ぶ手段として船を使っていた。20世紀初期にはアメリカに出稼ぎに行っていたこともあったらしい。ヒアリングによると、今でも船を持っている家が2件あり、1件は舟渡を副業として行っている。

・集落構造

川沿いに住居が集中しており、そのうちのほとんどが民宿を兼業している。少ない平地や崖錐地を最大限利用して農業を行っている。澄んだ内海を利用したダイビングなどの観光業も盛んである。



図5 池大明神から見る水田と住居郡 撮影=齋藤



図6 井田の澄んだ内海 撮影=落合



図7 煌きの丘から眺める井田と海 撮影=東野

3) 考察

地図などの事前情報を見る限りでは、民宿などの施設はあるものの、その閉鎖的な立地から自給自足的な側面が大きいのではないかと考えていた。しかし、ヒアリング調査から、観光業による町おこしを積極的に行っていることがわかった。サイクリング、ダイビング、塩づくりなど、様々なイベントを開催したり、休耕地に菜の花を植えるなど、景観づくりにも取り組んでいる。

また井田は非常に歴史のある村で、1500年ほど前に井田の塩について安康天皇が詠んだ歌が残されていることがわかった。江戸城の石垣にも、「井田」と記された石が使われているそうだ。山と海によって隔離された土地でありながらも、その時代ごとの中心地と関わりが深いという点が興味深い。

田んぼ、ミカン畑、山、海、その先に見える富士山といった風景は、日本の村の原風景ともいえる懐かしさを感じられた。

4) 集落を象徴する風景と名前

「海を通じて外と繋がる村」

周囲を山地に囲まれた孤立した立地だが、古くは海を介して船で都や江戸、アメリカとまで繋がり、現在は伝統的な製塩やダイビングなど、海からの恵みを活かして他の地域と繋がろうとしている。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

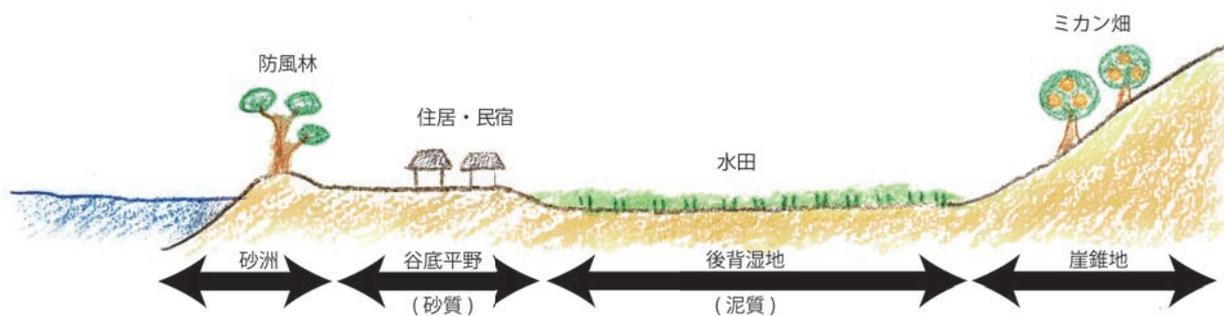


図8 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域



図2 調査地



図3 狩野川から河岸段丘を望む（撮影＝壹岐）

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

狩野郷は平安期にみえる郷名であり、小立野・本立野付近から湯河原にかけての狩野川流域一帯を指す。図にある比定地は河岸段丘上にある地形が特徴である。加えて、図の西側の比較的高地の山裾に神社や寺が集中している。また、南北に通る江戸期にできた下田街道(国道414号線)が東西を分けて、街道沿いに列をなすように家々が配されている。そして、図を見るといくつかの集落が点在しているのが確認できる。

- ・河岸段丘
- ・江戸期にできた下田街道が東西を分断
- ・小さな集落が点在している
- ・神社や寺が比較的高地に集中している

2) 実見によって得られた客観的情報

・環境

南側から北側へ用水路が縦横無尽に整備されていることが特徴的であると感じた。大平神社の道を進むと柱状節理によってできた旭滝があり水資源は豊富であるように感じた。

古い集落構造が実は河岸段丘上にあることが確認でき、鎌倉時代の墓が2段目の段丘上にあった。つまり、水害の被害はほとんどこの地形の場所では受けていないと予測できる。加えて、神社・寺は特に奥まった高台にある。

・地域経営

大平神社では年に5回も祭りが行われている。同時にタンクの水を月額500円でもらえる仕組みがある。

・交通

南北に走る国道414号線が交通の主要道路になっていた。

・集落構造

国道414号線がメインストリートとなり、家々や商店が建ち並ぶ。同時に東側にある程度平らな土地が確保でき、大きめの農耕地が展開し、西側は小さな田畑を持つ住宅群がある集落構造であった。



図4 河岸段丘上、鎌倉時代墓（撮影＝壹岐）



図5 国道414号 (Google Map)



図6 用水路

3) 考察

聞き取り調査を行いこの地域に流れている用水路は2種類あると聞いた。下田街道より西側の地域は南にある柿木川と深沢川から、東側の地域は狩野側を水源としている。近隣の地域であっても水源が異なることが発見できた。一見、地図で見ると狩野川の氾濫による水害を受けそうにも感じるが、河岸段丘上に鎌倉時代の墓が確認できる事から、安定した土地であることが言えるだろう。

また、年に5回大平神社にて行われる地域の祭りがあることから、地域の交流はいまだに色濃く残っている。その要因として、大きい群を成すような集落ではなく、小さな集落が点在することで、小集落単位での交流が持ちやすくなる環境があるのではないだろうか。狩野郷では、まず点在する小さい集落ごとでコミュニティを作り、それを繋ぐ国道により集落ごとの交流が生まれ、共同利用する縦横無尽な水路により環境を大切にするという精神が根付いているのではないか。

4) 集落を象徴する風景と名前

「2種類の用水路で繋がる集落」

狩野郷は田畑や集落が点在している印象を受けた。しかし、お祭りは大平神社一か所で執り行われる。南北に通る下田街道は外部との交通インフラであり、この地域のネットワークを表象しているのは2種類の水脈だと感じた。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

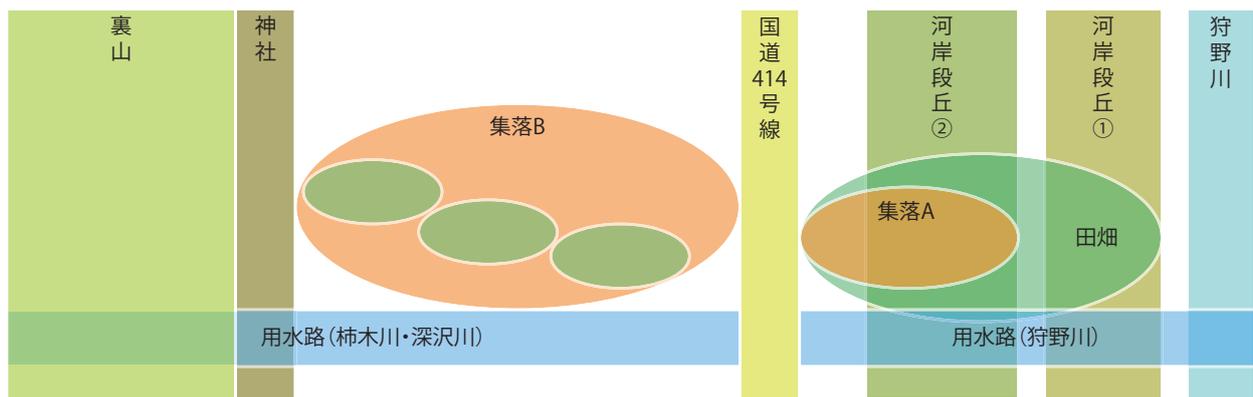


図7 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域(筆者加筆) Google Earthより

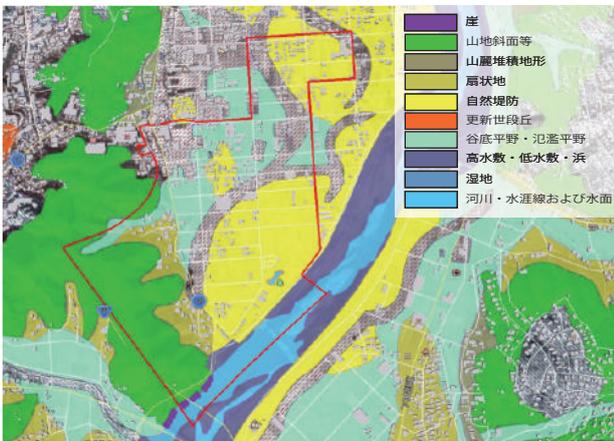


図2 土地条件図(筆者加筆) 国土地理院より



図3 八幡神社から見る県道、田畑、狩野川 撮影＝栗山



図4 特産物天野柿の規格選別に使う板 撮影＝小池

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

立地は西を山地とそれに沿う旧道、東を蛇行する狩野川に囲まれた平地である。狩野川沿いの自然堤防上には、明治期は桑畑が広がっていた。現在は住宅に加え、田や果樹園が広がる。かつて田として利用されていた谷底平野は主に住宅や学校、病院、店舗として利用されている。源頼朝に仕えた天野遠景が建立したとされる東昌寺が南西の山地傾斜に残る。その隣に八幡神社も見られる。北の伊豆長岡温泉、南東の狩野川リバーサイドパーク、西の伊豆の国パノラマパークなど、観光地化された要素に囲まれ共存する千年村。

2) 実見によって得られた客観的情報

・環境

県道の西側に古くからの集落がある。県道東側の平野部はかつては田んぼであり、①山の麓の集落、②平地の生産地、③生活水を引く川、という典型的な千年村の構造を持っていた。主要産業はたばこ、かんしょ、柿、サンシュユと変化しており、中でも柿は天野柿(次郎柿と富有柿)として特産物となっている。農業用水は元々狩野川に堰を設け、貯めた水を田んぼに流していたが、狩野川の蛇行の進行、灌漑技術の発達、狩野川台風(1958)による被災などを経て、郷東部から平野部に水路を引くようになった。

・地域経営

戦後の人口転入後、古い家の土地所有者がオーナーとなり転入者に耕作をさせる、という社会構造が生まれた。旧公民館は県道西側にあつたが、狩野川台風後、東側の郷中心部に建て替えられた。郷内の情報伝達はこの公民館とその便りを中心に行われており、集会は月に一度開かれる。祭礼について、この地域で著名なのは、源頼政公の妻のあやめ御前を偲ぶ源氏あやめ祭りである。地域固有の郷内区分として、狩野川上流方向から郷を四分し、「上(かみ)」「中(なか)」「下(しも)」「水落(みずおち)」と呼んでいるそうだが、その所以は定かではない。

・交通

山地と平野部を分ける県道は古くからこの土地に住む地主階層と転入した小作人階層を分ける、地理



図5 狩野川台風後整備された水路と堰 撮影=小池



図6 平野部の区画整備後の道路と田んぼ 撮影=栗山



図7 葡萄を始めとする田畑の多様な農産物 撮影=小池

的にも政治的にも、主要な道路と言える。また狩野川では、昔はいかだで材木などを下流に運搬したそう。狩野川台風による浸水後、平野部の区画整備が行われた。田畑を区分し車も通りやすい均質で広い道路ができたが、現在道路や鉄道の新増設の計画は予定されていない模様。

・集落構造

集落の核は東昌寺、八幡神社を中心とする古い宅地である。地主は代々この地に住む年配者が多いが、数十年前の移住者がその役割を担う場合もある。地主は各々の土地を分割して耕作をさせている。墓地は浄土宗天明山東昌寺の管轄である。集落の形としては、県道西部の古い家、東部の転入者住居と生産地、そして狩野川があり、郷東部から水を引く。

3) 考察

平野部に住む兼業農家の方によると、昔は皆農家に従事していたためある程度の地域の一体感があったそうだが、現在は兼業農家が主流で住民間のつながりが薄れているとのことであった。現状としては都市圏への人口流出の抑制、空き家の対処と活用などが直近の課題で、祭事や集会による活性化や若者の呼び込みがその対応に繋がると考えられる。

4) 集落を象徴する風景と名前

「産業構造を多様に変化させる半勤半農村」

人口転入、狩野川台風、農産物需給などの変化に合わせて、県道を境とする地主一小作の関係を軸に産業構造を時代に沿って臨機応変に変えていった。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

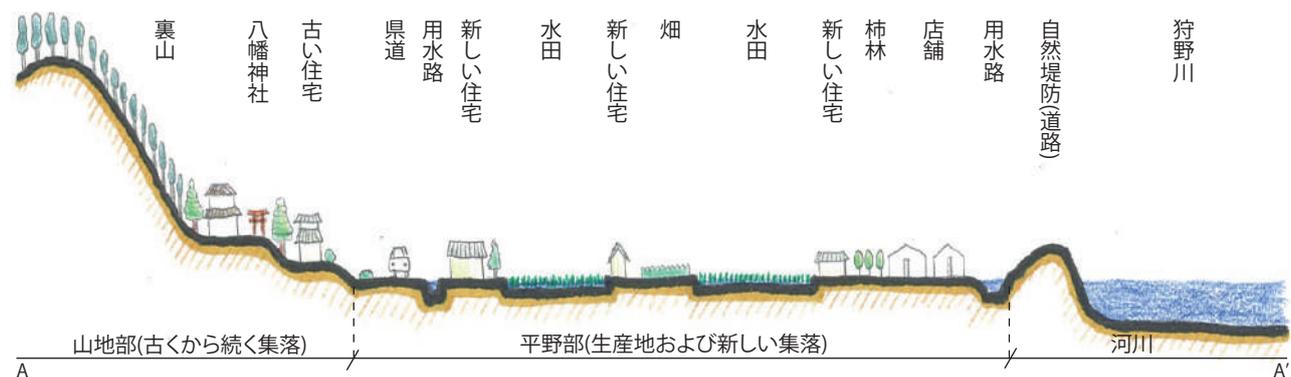


図8 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域(筆者加筆) Google Earthより



図2 今昔マップ(筆者加筆)時系列地形図閲覧ソフトより



図3 正蓮寺本殿(撮影:杉本)



図4 太平山(北)から大男山(南)を見た様子(撮影:遠藤)

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

西側を江浦湾、東側を狩野川、南北を太平山と大男山に囲まれた斜面地及び谷底平野に位置し、入り組んだ谷戸となっている(図1)。1955年の狩野川台風では1000人以上、続く1956年の伊勢湾台風では5000人以上の死者が出た。これを受け、比定大字の南部には1965年に狩野川放水路が通され、狩野川の氾濫時には開門して雨水が湾に放水されるようになった(図5)。とりわけ氾濫地域であった郷の北東部では養蚕が、北西部では蓮の栽培が行われていた(図2)。郷の中央部を南北に伊豆中央道が通り、県内主要交通の通過点となっている。

2) 実見によって得られた客観的情報

本調査では、南江間仲之台、南江間鳥打および南江間珍野の北部を調査した。

・環境

北東部で狩野川が決壊し、郷域の大部分を飲み込んで南西部まで浸水したという話を聞いた。氾濫地域を中心に桑やみかんが栽培されていたという。古くから養蚕が盛んだったために、桑が最盛期を迎える8月中旬を避け、7月末に盆の催事を行う「みそか盆」という慣習は今でも地域に残っている。

・地域経営

お話を伺った正蓮寺は、保育園や墓地を経営したり寺の清掃や蓮の植え替えといった催し物を行っており、子供から老人まで地域の人が集まる場となっていた(図3)。住職について村を巡ると、道中で会う人は皆知り合いであった。

・交通

狩野川放水路の開通により南江間珍野は南北に分断された。交通の不便性によって地域の連携が希薄化すると懸念されたが、開通後も住民間の交流は続いているという。

・集落構造

山地と谷底平野との間(山の裾)に民家が並び、低地は水田や桑畑として利用される伝統的な集落の景観が広がっていた(図4)。明治期よりみられる旧街道は現在国道134号となっており、道沿いには創業100年以上の酒屋や地域の地主の家が建っていた。



図5 狩野川放水路の水門 (撮影:遠藤)

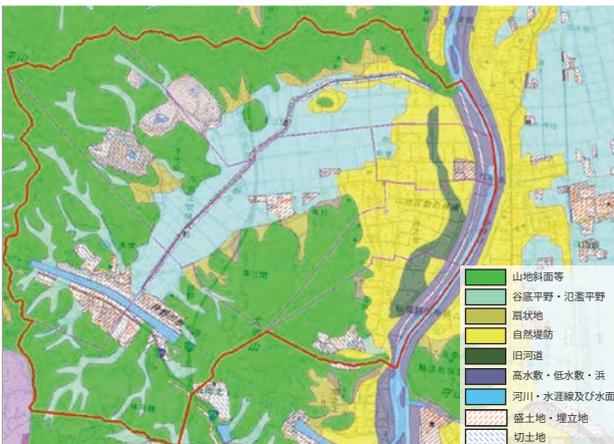


図6 土地利用図(筆者加筆) 地理院地図kmlデータより



図7 沼川の北側から見た比定大字 (撮影:杉本)

3) 考察

河川と湾に囲まれた谷地であることや、氾濫地域とその他の場所で土地利用が異なるように思われる(水田と桑畑の境界線が土地利用図における氾濫平野と自然堤防の境界線と酷似している)ことなどを考慮すると、この地域は、水害の起こりやすい土地に対し生活や生業を適応させてきたと推測できる(図6)。近代以降、台風による洪水で何千人もの死者が出たこともあるが、調査時にはそれが想像できない程、のどかでゆったりとした印象を受けた。狩野川放水路の建設を受け、南江間珍野にあった自宅を引き家によって移動させたという方は、地域の分断や自分の土地を手放すことに抵抗を覚えたものの、水害を緩和することが地域にとって一番の価値であると考え承諾したという。災害の避けられない地域で命や住まいを守るためには、個人個人が逐一災害に対応できるしぶとさと柔軟さを持っている必要があるだろう。一方、災害による地域の損失が出た際には、人々はしばしば集まって供養の気持ちや痛みを分け合ってきたそうだ。今回の調査を通して、災害が身近にある地域では、統合的な自治体制をもつのではなく、災害への備えや発生時の処置、被害からの復興、また損害に対する供養など、生きるために住民が培ってきた小さな知恵や技術が、持続的な地域経営に寄与しているのではないかと感じた。

4) 集落を象徴する風景と名前

水害に鍛えられた集落:多くの水害を乗り越えて持続してきた集落であると考えられるため。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

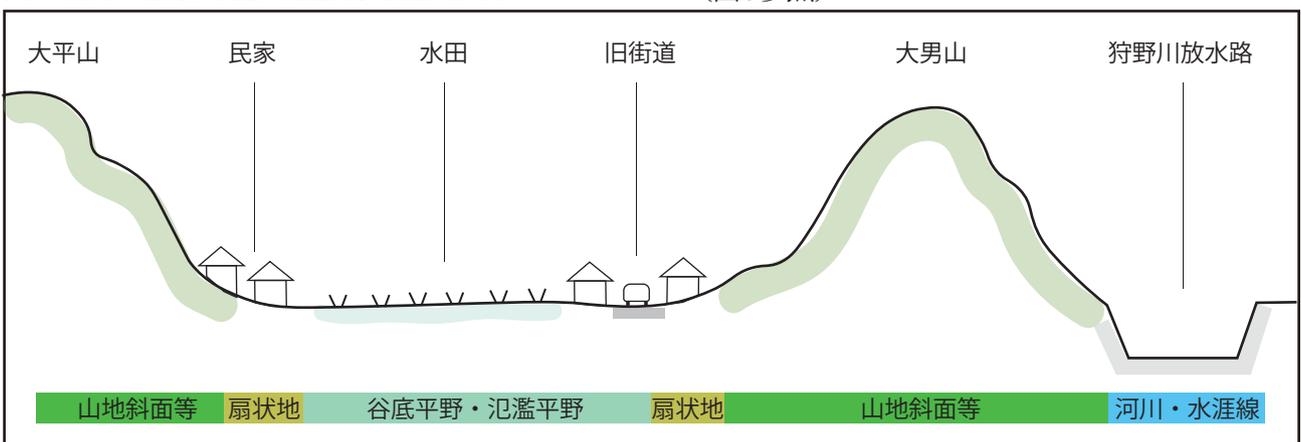


図8 A-A' 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域(筆者加筆) Google Earthより



図2 1974年航空写真(筆者加筆)国土地理院より



図3 下田街道(現国道136号) 撮影＝佐藤



図4 旧街道 撮影＝佐藤

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

田方郡茨城郷は、現在の葦山大字原木付近に比定される。郷内中央付近を南北に下田街道(国道136号線)(図3)が通過する。郷内西側を流れる狩野川と下田街道との間に集落(原木)が形成される。大部分の建築物は自然堤防上に位置しているが、氾濫平野の水田地帯の中にも1970年代以降に切土・盛土された土地があり、そこにも建物が点在している。また、文献によると原木は伊豆東・西海岸に至る道が分岐する交通の要衝であり、人馬継立も行われていた。

2) 実見によって得られた客観的情報

国道136号線を含めた郷内西側と、郷内北側に位置する愛宕神社周辺を実見した。以下はそれらによる報告である。

・環境

ヒアリングによると、この地域は伊勢湾台風によって建物の一部の飛散や浸水などの被害を受けた。一方で図2の赤色斜線部は1mほど地面が高くなっており、この箇所のみ狩野川氾濫時に浸水しなかった。

・地域経営

旧街道沿いには成願寺や熊野神社など、寺や神社が多く建っているが、どの建物も比較的新しいことが分かった。ヒアリングによると、台風によって旧街道沿いの寺や神社が被害を受けたが、住人の協力を得て建物を修復した。

また、原木に3つの道祖神(図2)が祀られていた。ヒアリングによるとこれは、村内の子供たちの無病息災を祈願してつくられた『さいの神』の道祖神であった。

・交通

ヒアリングによると、現在畑として利用されている川沿い(国道136号線と旧街道の分岐点付近)には、かつて河岸があり、木や米の運搬が行われていた。

・集落構造

旧街道沿いに建つ建物は、旧街道と県道129号線が交差する点を境に南北で様子が異なる。北側は広い敷地を所有した古く大きな住宅が多い。これに対



図5 さいの神 道祖神 撮影=佐藤



図6 愛宕神社 撮影=吉川



図7 堤防から見た旧街道沿いの風景 撮影=兼信

して、南側は狭い敷地の中に新しく小さな住宅が多く建っていることがわかった。ヒアリングによると南側は県道になったことで土地の価格が向上し、もともと所有していた土地を売却する土地所有者が相次ぎ、広大な土地が細かく分割され、小さな住宅が建てられた。

3) 考察

原木は現在も、これまでも多くの道によって支えられてきた。かつては陸や川を用いて物資輸送の拠点として賑わった。今は原木は鉄道の駅や国道を持つことによってこの集落に住みながらも外で働くことを可能としている。実際に寺社や家の生垣が綺麗に維持管理されていることからこの地に今も人が多く暮らしていることがわかる。このように複数の「道」を持ち利用することが地域の持続に繋がっていると推測される。一方で、道を用いて郷外で働くため、地域の田畑の担い手が減り管理がなされていない様子や、日中の人通りの少ない様子が見られ、活気があるとは言い難い。

4) 集落を象徴する風景と名前

「道とともに変わる村」

川や陸の道を用いた物資の拠点で栄えた村から、国道や鉄道を用い外で稼ぐ村へと、道の使い方を変化させながら集落を持続させている。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

参考文献:

竹中理三他編『角川日本地名大辞典8 神奈川県』角川書店、1983年
 「下田街道 道中記」,
 <<http://home.e02.itscom.net/tabi/shimoda/2baraki.html>>,
 2019/08_07アクセス

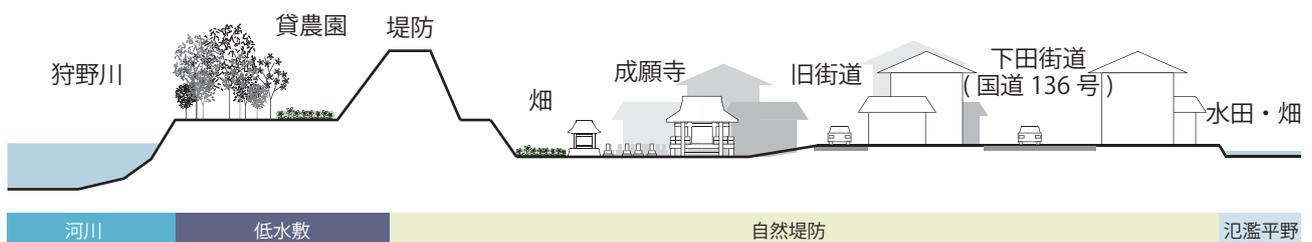


図8 A-A' 断面ダイアグラム

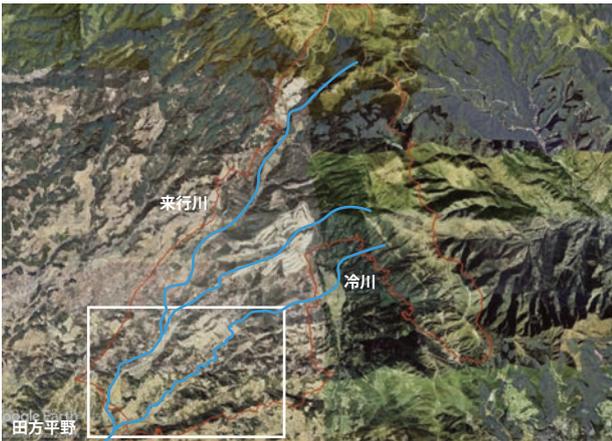


図1 比定の大字領域（筆者加筆）



図2 図1白枠部拡大（筆者加筆）



図3 来光川沿い_生産地（撮影＝加藤）



図4 冷川沿い_生産地（撮影＝加藤）

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

比定地である大字桑原は面積が大きく、北は箱根のカルデラの外輪山に接し、東は熱海との境の尾根を境界にしている。枝分かれした3つの谷に集落が散在し、谷の合流地点で田方平野に接している。

来光川は箱根を水源とする長い谷を形成し、現在も低地は水田利用され、伝統的集落が残存している。来光川と冷川の間は台地は頂部が平坦で(図7C-C'断面)、近代以前から畑地として利用されていた。現在は畑の間に小学校が建てられている。

冷川流域の斜面は1980年代以降に宅地開発されている(ヒューマンヒルズ函南)。来光川、冷川とも上流部分はゴルフ場開発されている。

2) 実見によって得られた客観的情報

・環境

(図3) 来光川の下流では稲作や酪農が営まれ、上流ではスイカやトウモロコシやトマトなど寒暖差の大きい気候を好む作物が多品種少量生産されていた。中でも函南スイカは農家の収入源となっており、昭和30年～生産され続けている。

(図4) 冷川沿いは来光川沿いほど大規模な生産地は見られず、住宅の敷地の中にある小さな畑やビニールハウスとして確認された。

・集落構造

(図8A-A'断面) 来光川沿いの郷域に入る手前に郷全体で一番古いと言われる家(杉山家)があった。中流付近には、廃仏毀釈の際に移転され保護された郷域内の仏像を集めた仏の里美術館や、水の神を祀る熊野神社が見られた。杉山家の付近と、仏の里美術館付近に古くからありそうな家が集中していた。上流付近には戦後にこの地に訪れた新興宗教団体(宇宙信仰)が作った施設(天文台)が見られた。

(図8B-B'断面) 冷川沿いは来光川沿いほど多くの民家は見られなかった。中流に高源寺という800年近く続くお寺が存在し、来光川沿いも含む郷一体に檀家を抱えていた。

・地域経営

家が建て替わっていたのにも関わらず、郷内最古の家を谷を隔てた複数人が把握していた。



図5 冷川沿い_高源寺 (撮影=田淵)



図6 冷川沿い_ゴルフ場 (撮影=加藤)

貸し農園や、かつての薪炭林がニュータウンとなっていたり、寺が抱える山の一部分がゴルフ場として売り渡されるなどの土地の運用が見られた。

・交通

(図8C-C'断面) 廃仏毀釈の以前、高源寺は修行の場であり、山を越えた来行川沿いにお参りの場として本院を持っていた。本院と高源寺は山の中を抜ける細い九十九折の道でつながっていた。本院が失われて以来利用の頻度は減ってしまったが、現在でも軽トラックが通れるくらいの幅の道として残っている。

3) 考察

南向き斜面が少ない中、スイカなど気候に適した作物を上手に選び収入源としている。奥まった隠れ里だが、だからこそ伊豆半島の逃れてきた源頼朝ゆかりの地となり高源寺の歴史が生まれたのだろう。郷内最古の家の共通認識や、高源寺が抱える檀家の広さに見られる2つの谷の繋がりは、かつて高源寺の本院があり行き来があったことに寄るだろう。

仏やお寺を本来の場所から移転させることで守ったり、手に余っている土地を貸す/売り渡すなど、有形物の運用の巧みさが伺える。

4) 集落を象徴する風景と名前

「谷から谷へ、意識は一つ」村

2つの谷で土地利用は個別解がなされているが、かつての高源寺の本院が、同じ1つの郷であるという意識を山を越えて繋げていた。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

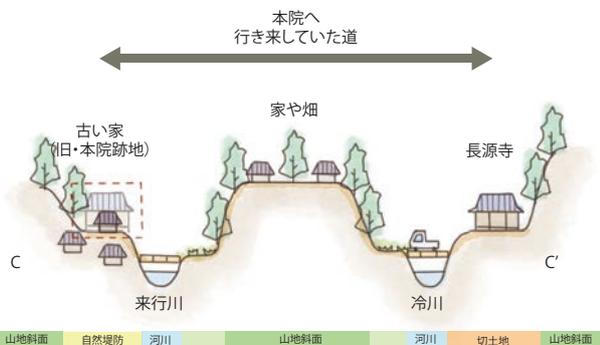


図7 C-C'断面ダイアグラム(筆者作成)

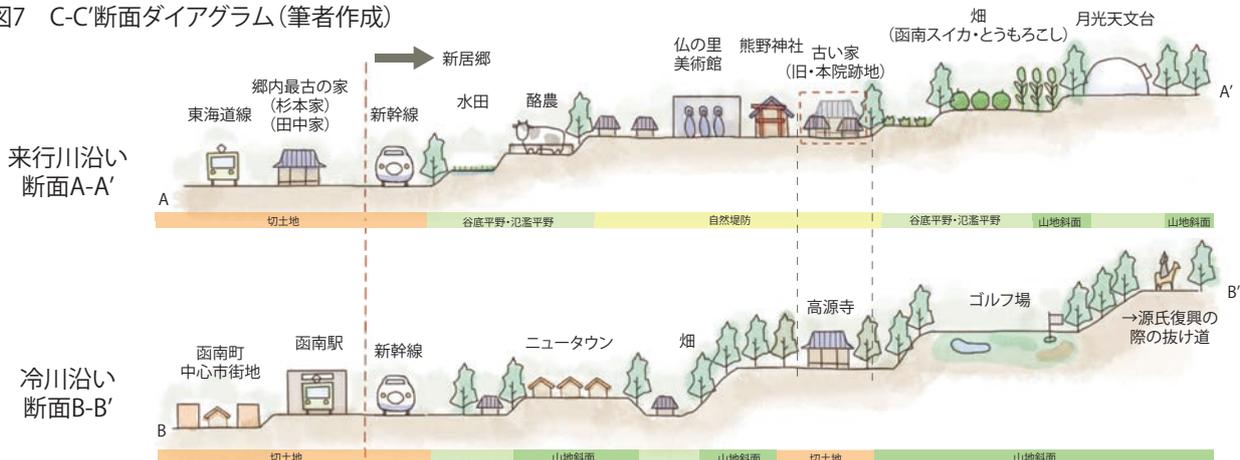


図8 A-A'、B-B'断面ダイアグラム(筆者作成)